

事例発表 経営部門(肉用牛)

「経営努力と高い飼養管理技術で
実現した揺るぎない肥育経営」

村上市 黒毛和種肥育経営
山賀 治彦 様

1900

1901

1902

1903

1904

1 地域の概況

当該経営は平成20年4月に4市町村の合併で新たに村上市となった旧朝日村に位置している。村上市では規模の大きな養鶏、養豚、肉用牛が多く、重要な位置づけを占めており、畜産、水稲が地域農業の柱となっている。

市町村別公表(平成18年)の農林統計では、地域の農業産出額246億円に占める畜産の内訳は136億円(55%)にのぼり、なかでも黒毛和種肥育牛の飼育頭数(平成24年)は県内1位で、平成元年から銘柄化を進めてきた「にいがた和牛村上牛」は県内和牛肥育の牽引役として最大の産地を形成している。

2 経営の概況

(1) 労働力

総労働数				
(人/年)	家族 (人)	常時雇用 (人)	パート (人/日)	研修生 (人/日)
1.8	1.5	-	0.3	-

(2) 経営の実績・技術等の概要

区分	単位	平成24年時の実績
飼養頭数(肥育牛)	頭	86.5
肥育牛出荷頭数	頭	51 うち去勢 47
肥育牛出荷月齢	か月	30.6 うち去勢 30.6
肥育日数	日	648 うち去勢 645
出荷体重	kg	790.1 うち去勢 797.3
1日当たり増体重	kg	0.76 うち去勢 0.78
格付4等級以上率	%	88.2 うち去勢 87.2
堆肥販売量	t	120
堆肥散布面積 (販売を除く)	a	450

(3) 主な施設・機械の保有状況

施設	機械
牛舎、堆肥舎、作業場	畜産基地機械一式、トラクター、コンバイン、田植機、乾燥機、軽トラック

(4) 近年の活動の推移

年月	事項	備考(左記に伴う施設整備等)
平成 18 年 12 月	クリーンビーフ生産農場に認定	
平成 19 年 5 月	中古牛舎を取得し、肥育牛を 25 頭増頭	牛舎、堆肥舎(兼もみ殻保管庫)
平成 21 年 10 月	新潟県優良農業経営体表彰で農協中央会長賞を受賞	
平成 22 年 10 月	にいがた和牛肥育名人に認定	
平成 23 年 1 月	指導農業士に認定	
平成 23 年 9 月	稲わら収集機をリース導入し作業効率を向上	ロールベアラーの導入

3 特色ある経営・生産活動の内容

(1) 経営の特徴

新潟北部畜産基地建設事業で設置された施設（畜産団地）等負担の償還を優先し、所得確保や資金繰りに苦勞した経験を踏まえ、自己資本の増強による健全経営に努めた。そして、肥育技術と肉質の改善に取り組み、枝肉販売価格の向上による経営安定を図った。

平成 18 年度時点では飼養規模は 56 頭であったが、平成 19 年に廃業経営から中古牛舎を取得し、稲わら収集も拡大しつつ約 1.5 倍の経営規模拡大を実現した。

しかし、平成 23 年度は県外産稲わらから検出された放射性セシウムの問題で一時的に出荷停滞の事態を生じ、加えて飼料高騰の影響から飼料給与量、費用が膨らんだ。また、更新整備時期を迎えた施設、機械での減価償却費など、避けられない費用の増加も見られるため、一層の枝肉成績向上による収支改善をめざしている。

(2) 経営戦略

明確な所得目標を設定し、これに必要な飼養規模や出荷成績を計画的、着実に実現している。

戦略として、大きな利益を狙うよりも、BMS 4 以下を出さない高位平準化を目指す。そのための具体的な対策として、①子牛価格が高騰した場合も、資金繰りにとらわれず、質の良い素牛を見極め導入すること。②牛舎内の清潔やゆとりある飼育スペースの確保と、飼料摂取量低下の早期発見及び適切な対処などを実践している。

にいがた和牛村上牛ブランドの評価を高めるため、定時定量の出荷を心がけ、情勢変化にとらわれず飼養規模を維持している。

農作業や集落行事で忙しくとも、肥育牛の状態と飼料摂取を怠りなく観察しトラブル発生防止を実践することが、肥育技術の高さとあいまって規模拡大後に陥りがちな技術低下の回避や、高い技術成績（枝肉格付 4 等級以上率 80% 以上）を維持する基礎となっている。

肥育期間は 2 年もの長期にわたるため、家畜の改良や肥育技術が日々進歩するが、自分の肥育技術に満足することが何より危険と考えている。今の技術から大きく差を付けられていないか、遅れをとっていないか、誤った方向に進んでいないかを自分に問いかけ続けて、現在の肥育実績を達成した。

4 地域への貢献

(1) 耕畜連携の取組

集落生産組織に加入し、構成員の転作（わら専用稲）作業を自ら中心オペレータとして実践してきた。現在では、集落 20ha の水田のうち、約 4.5ha の稲わらを収集している。

また、近隣生産組織とも連携し、稲わらの収集と農地への堆肥還元を積極的に実施するとともに、近隣農家の畑には求めに応じ、堆肥を供給・散布し自給飼料の確保と土づくりを通じた耕畜連携に努めている。

さらに、一部に新規需要米として飼料用米を作付けし、村上・豊栄地区飼料用米生産利用推進協議会に生産側農家として参画することで、養鶏農家にも提供するほか、主食用水稻以外の稲わら確保も行っている。

(2) 担い手育成のための指導者としての活動

にいがた和牛の担い手を育成するため、にいがた和牛肥育名人、指導農業士として、若手農業者に技術指導を実施している。

また、地域の農業まつり等でにいがた和牛村上牛を販売し、にいがた和牛村上牛の知名度向上に積極的に貢献している。

5 今後の経営展望

経営を継続するため、意欲ある担い手への第3者継承を含む後継者の確保について検討を始めている。

経営のさらなる安定のために、自己資本比率の一層の向上や出荷成績では肉質3等級以下を出さない技術の高位安定を図っていく。

また、地元や県内での耕畜連携を拡大し、安全な稲わらの安定的確保に向けた取組を強化していく。

優秀畜産表彰 経営部門(肉用牛) 村上市 山賀治彦氏のパワーアップ経過

更なる経営 発展に向けた レベルアップ



商標登録第4804405号



H18 クリーン・ーフ
生産農場認定

H18経営概況	
飼養頭数	56.4頭
年間出荷	31頭
4等級以上率	74.2%
稲わら収集	1.5 ha



当初所有の牛舎と内部
(畜産基事業で整備)



H22 肥育名人認定
(畜産フェスティバルに協力)



H19 中古牛舎を調達し、
肥育牛を拡大



H22 指導農業士
認定式終了後(左端)

H23経営概況 (H18比)	
飼養頭数	86.5頭 (153.4%)
年間出荷	51頭 (164.5%)
4等級以上率	88.2% (118.9%)
稲わら収集	4.5 ha (300.0%)



H23 収集機を補助導入し
稲わら収集面積を拡大



~H18
村上牛生産協議会にJA中条町が参加(H18)

H19

H20

H21

H22(宮崎県で
口蹄疫発生)

H23(東日本震災と汚染稲わら
で出荷停滞、価格低迷)